

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある日のこと、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは、川へせんたくに行きました。

おばあさんが川でせんたくをしていると、川上から、うりが流れてきました。おばあさんが、

「いいうり、こっち来。よたうり、あっち行け」というと、いいうりが、おばあさんの前に流れてきました。おばあさんは喜んで、うりを拾ってうちに持ってかえりました。そして、おじいさんが帰ってきたら、ふたりで食べようと思って、戸だなにしまっておきました。

しばらくして、おじいさんが山から帰ってきたので、ふたりでうりを食べようとした。すると、うりは勝手にふたつにわかれて、中からかわいい女の子が生まれました。

おじいさんとおばあさんは、大喜びしました。うりから生まれたので、うりひめと名前を付けました。

うりひめは、ずんずん大きくなりました。やがてお嫁に行くことになったので、おじいさんとおばあさんは、嫁入りじたくをしに町へ買い物に行くことにしました。ふたりは、出かける前に、うりひめにいいきかせました。

「うりひめや。だれが来ても、戸を開けて機を織っているところを見せるんじゃないぞ」
そこで、うりひめは、ひとりで留守番をしながら、

トントン トンカラリン トントン トンカラリン

と、機を織っていました。

しばらくすると、あまんじやくがやって来て、戸をたたきました。

「ちよっと戸を開けて、機を織っているところを見せろ」
うりひめは、

「おじいさんとおばあさんにしかられるから、いやだ」とことわりました。すると、あま

んじゃくは、

「ほんのちよつとでいいから、開ける」といいます。

「どれっぽっちでもだめ」

「それなら、ほんとうに、うでの入るだけでいいから、開ける」

うりひめは、しかたなく、うでの入るだけ開けてやりました。すると、こんどは、

「首の入るだけ開ける」といいます。あんまりいうので、首の入るだけ開けてやりました。すると、

「こんどは、胸むねの入るだけ開ける」といいます。だんだんに開けさせて、とうとうあまんじゃくは、ずるずるべったり、家の中に入ってしまった。

あまんじゃくは、うりひめの機織りのじゃまをして、どうしようもありません。しまいに、

「いっしょに外へ遊びあそびにいこう」といいだしました。あんまりいうので、うりひめは、しかたなく遊びあそびに出て、いっしょにうら山へなしの実みを取りとりにいきました。

うら山まで来ると、あまんじゃくは、なしの木に登のぼって行って、ひとりで実を食べて、うりひめにはさっぱりくれません。

うりひめが、

「わたしにも、ひとつおくれ」というと、あまんじゃくは、なしの実に鼻はなくそをつけて落おしたり、かじりかけを

落おしたり、まだ熟じゅくしていないのを投なげたりして、

いい実はひとつもくれませんでした。そこで、うりひめは、

「それなら、自分で登って取るからいい」といって、木に登っていきました。

あまんじゃくは、木から下りて、木のみきにいばらを

まきつけて、うりひめが木から下りられないようにしました。

そして、うりひめのうちにもどると、うりひめに化ばけて、

トントン トンカラリン トントン トンカラリン

と、機を織っていました。

夕方、おじいさんとおばあさんが町から帰ってきました。ふたりは、あまんじやくが化けていることに気がつかないで、いっしょに晩ご飯を食べて寝ました。

あくる日は、うりひめの嫁入りの日でした。おじいさんとおばあさんは、あまんじやくにきれいな着物を着せて、馬に乗せました。それから、くりの木平を通ろうか、なしの木平を通ろうかと考えましたが、なしの木平を通っていくことにしました。

花嫁の行列がなしの木の所まで来ると、泣き声が聞こえてきました。見ると、木の上で、うりひめが泣いていました。そこでやっとな花嫁がにせものだど分かって、みんなであまんじやくを馬から引きずりおろしました。そして、うりひめを木から下してきれいな着物を着せて、嫁にやったということです。

* よたうり 「よた」は、品質などが悪いこと。「よたうり」は、まずくてよくないうり。

* あまんじやく いたずら者の鬼。

出典 『語りの森昔話集2ねむりねっこ』村上郁再話／語りの森